

幼児期における性役割の形成

－性的ラベリングとその関連要因－

大久保 淳 子* ・ 伊 勢 慎**
櫻 井 国 芳*** ・ 池 田 孝 博****

要旨 本研究の目的は、幼児期における「性的ラベリング」の実態ときょうだい構成および家庭生活の関連について検討することである。F県内の幼稚園に在籍する69名を対象に性的ラベリングを確認するための面接調査と、幼児の保護者を対象としたきょうだい構成および家庭での生活に関するアンケート調査を実施した。その結果、仲間同性選択率は男児女児ともに加齢に伴い高くなるが、スタイル同性選択率は、男児で加齢に伴い高くなり、女児では低くなる。仲間とスタイルが対立するコンクリフトにおいて、女児は加齢に伴い仲間優先傾向が強くなるが、男児はスタイル優先傾向が強くなる。また、このような性的ラベリングの差は、年齢よりも性において顕著に現れるが、その影響は同性きょうだいよりも異性きょうだい大きい。家庭での生活では、帰宅後の身体活動時間が長い男児は遊びのスタイルを優先し、身体活動時間の短い女児は、女児同士で遊ぶ傾向が示された。

キーワード 性的ラベリング / gender labeling、幼児 / infant、生活習慣 / lifestyle、
きょうだい構成 / sibling configuration

緒言

性役割の概念は、すでに5-6歳の幼児期に習得されるとされている(小橋川, 1967)。実際に、多くの幼児が1日を過ごす保育所や幼稚園など、子ども教育の現場では、物的環境とし

て、衣服や持ち物、表示物における男女の色分け、人的環境として、保育者の働きかけや園児同士の相互作用における男女差が認められる(青野, 2008)。つまり、幼児期には、好むと好まないに関わらず、性や性差に関する影響を周囲から受け、性役割行動を獲得する際のラベリ

*福岡県立大学人間社会学部・准教授

**福岡県立大学人間社会学部・講師

***福岡県立大学人間社会学部・准教授

****福岡県立大学人間社会学部・教授

ングがされている。たとえば、岩崎・朴（2012）が、「5歳児になると、男児は粗大運動を用いる遊び（リズムよくブランコをこぐ、5～6回以上続けて縄跳びをする、太鼓橋に登って渡ったり、飛行機、登り棒で上り下りする、30mくらいまっすぐ走る、目的に合うようボールを投げたり、両手で受け止める）が増え、女児は微細運動を用いる遊び（はさみを使って簡単な形を切る、想像していろいろなものを描く、ひもや縄を結ぶ、よく飛ぶように飛行機の折り方や飛ばし方を工夫する、好きな楽器を操作していろいろな音を出す）が多くなる」と述べている。さらに、鈴木（2003）も、「幼児には自分の性にあった遊びスタイルを選択する傾向があり、遊び仲間よりも遊びスタイルを優先させて遊びを選択する」と述べており、性に関するラベリングは、遊びや行動と深く関連していることが予想される。

ところで、幼児期における遊びや行動は、様々な要因によって規定されることが報告されている。たとえば、岩崎・朴（2009）は、家庭での過ごし方と幼稚園での過ごし方が共通している子どもが多いと述べている。また、男女ともに運動能力が高い子は、生活・遊び技能が高く、運動能力が円満に発達している幼児は、幼稚園での生活や遊びがスムーズに行われ、運動能力が高い子は園での生活・遊びの場面でも自分の能力を発揮しやすいという報告もある（岩崎・朴，2012）。このように、家庭も含めた、幼児の遊びや行動における身体の活動性は、「性的ラベリング」に関与すると考えられる。また、きょうだい構成は子どもの体力に影響することも示唆されていることから（伊藤・富田，2007）、きょうだい構成と性的ラベリングの関連も検討する必要がある。さらに、増田・中尾

（1981）は、「男児は女児に比べて性に適切な行動をより早く、しかも明確に限定され、また性的ラベリングという社会的刺激に対して敏感である」と述べており、性的ラベリングの形成過程には、性差があることも予想される。

現在、保育所保育のガイドラインとされている保育所保育指針（厚生労働省，2008a）には、「子どもの性差や個人差にも留意しつつ、性別などによる固定的な意識を植え付けることがないよう配慮すること」が明記され、さらに、保育所保育指針解説書（厚生労働省，2008b）では「子どもが将来、性差や個人差などにより人を差別したり、偏見を持つことがないように、人権に配慮した保育を心がけ、保育士等自らが自己の価値観や言動を省察していくことが必要」とされている。

また、幼稚園における教育に関しても、「幼稚園教員の資質向上について—自ら学ぶ幼稚園教員のために（報告）」（文部科学省，2002）の中の「人権に対する理解」に、「幼児が集団生活を初めて経験する場としての幼稚園において、教員は、いかなる差別や偏見もゆるさないという、人権についての正確な理解に基づき、幼児が、互いを尊重し、社会の基本的なルールの存在に気付き、それに従った行動ができるような素地を身に付けるように指導する力が求められている」という記載がある。人間の形成過程における性役割の習得は、自然なプロセスであると思われる。しかしながら、そのことが子どもの健康的な発育発達を阻害することもある。例えば、近年、身体活動不足や体力低下が女児において顕著であることが問題になっている。さらに、性に関わる差別や偏見などは、人権に関わる大きな問題である。

本研究では、幼児期における「性的ラベリン

グ]の実態について検討するとともに、「性的ラベリング」ときょうだい構成および家庭生活の関連について検討することを目的とする。ただし、本研究は、このような性役割や性的ラベリングの良否を問題にするのではなく、その形成過程の一側面を客観的に捉えるという立場で検討する。

方法

1. 標本数

本研究の対象者は、表1に示すように、F県内の公立幼稚園に在籍する4歳児33名(男児17名、女児16名)、5歳児36名(男児16名、女児20名)の69名である。すべての幼児に、性的ラベリングの検討を目的とした面接を実施した。また、幼児の保護者を対象にアンケート調査票を配布し、きょうだい構成や家庭での生活に関する調査を行った。

2. 調査内容

表1 標本数(人)

	男児	女児	小計
4歳児	17	16	33
5歳児	16	20	36
小計	33	36	69

1) 面接調査

性的ラベリングの程度を確認するための面接は、鈴木(2003)の手法を参考に実施した。面接は幼児一人ひとり個別に実施した。対象児には、絵の描かれたカードを見せて、それに対する反応を評価した。質問項目は、(1)遊び仲間選択、(2)遊びスタイル選択、(3)遊び仲間と遊び

スタイルが対立しているコンクリフト選択の3つである。(1)遊び仲間選択では、男児が描かれたカードと女児のカードを示して、この2つのカードのうち、どちらに描かれている子どもと遊びたいか質問した。次に、頭髪の色と髪型の異なる男児と女児のカードを示し、先と同様に、いずれと遊びたいか質問した。(2)遊びスタイル選択では、主に男児がよく使って遊ぶと思われるおもちゃが描かれたカードと、女児のおもちゃが描かれたカードを示し、どちらを使って遊びたいか質問した。おもちゃが描かれたカードは、男女セットで4組用意し、その組み合わせは、「自動車と人形」、「サッカーボールと化粧道具」、「紙飛行機とお絵かき道具」、「新幹線とままごと道具」とした。(3)コンクリフト選択は、男児が女児のおもちゃと思われるもので遊んでいるカードと、女児が男児の遊びスタイルで遊んでいるカードを見せ、どちらの遊びに参加したいか質問した。コンクリフトの組み合わせは、「男児・人形」と「女児・自動車」、「男児・化粧」と「女児・サッカーボール」、「男児・お絵かき」と「女児・紙飛行機」、「男児・ままごと」と「女児・新幹線」の4組とした。

2) アンケート調査

保護者を対象としたアンケート調査は、性的ラベリングに影響を与えていると思われる要因を抽出し、以下の項目を選択した。きょうだい構成では、「同性きょうだい」および「異性きょうだい」について、その有無を確認した。また、家庭での生活については、降園後の身体活動時間(分)、遊び時間(分)およびスクリーンタイム(分)とした。

3. 統計処理

性的ラベリングの集計については、比率を用いて表記した。(1)遊び仲間選択では、カードが2組のため、同性の選択率（仲間同性選択率）を、0%、50%、100%とした。(2)遊びスタイル選択は、4組のカードを用いたため、同性の遊びスタイルを選択する比率（スタイル同性選択率）を、0%、25%、50%、75%、100%で集計した。(3)コンクリフト選択では、人間を基準に、同性を選択する場合を「仲間優先」として、4組のカードに対して仲間優先で選択する率を、遊びスタイルと同様に、0%～100%で集計した。その上で、性と年齢、性と同性きょうだいの有無、性と異性きょうだいの有無について、仲間同性選択率、スタイル同性選択率、コンクリフトの仲間優先率の平均値の差の検討を、一般線型モデルを用いた二元配置の分散分析（Two-way layout ANOVA with GLM）を用いて検討した。さらに、性的ラベリングと家庭での生活の関連について、ピアソンの積率相関係数を用いて検討した。なお、統計的検定の有意水準はすべて5%とした。

結果及び考察

1. 基礎統計

表2に、性・年齢別の仲間同性選択率、スタイル同性選択率、コンクリフトの仲間優先率と家庭での様々な活動時間（分）の平均値を示している。女兒のスタイル同性選択率を除き、仲間と遊びスタイルの同性選択率は加齢とともに上昇しており、年齢的発達とともに男児らしさ、女兒らしさが進むことが窺える。ただし、コンクリフトの仲間優先率では、男児に比較して女兒が高く、加齢とともに上昇する。しかしながら、男児の仲間優先率は低く、加齢とともに減少している。つまり、男児が優先しているのは、遊び相手の性別ではなく、遊びのスタイルであることが窺える。

家庭での生活については、スクリーンタイムが遊び時間よりも長い傾向にあり、身体活動はそれらよりも短い傾向にあることが示された。遊びを含めた幼児の活動は、静的なものが中心になっていることが窺える。

表3は、きょうだい構成の度数分布を示している。本研究のデータにおいて、同性と異性のきょうだいの有無に関しては、性別や年齢において極端な偏りは認められない。

表2 基礎統計

	男児		女兒	
	4歳児	5歳児	4歳児	5歳児
仲間同性選択率 (%)	91.2	96.7	76.7	77.5
スタイル同性選択率 (%)	85.3	90.6	83.3	73.8
仲間優先率 (%)	39.7	23.3	45.0	52.5
降園後の身体活動 (min)	48.0	75.0	86.7	94.4
遊び時間 (min)	128.8	122.3	126.0	144.4
スクリーンタイム (min)	153.5	142.5	114.0	157.5

表3 きょうだい構成（人）

		男児		計	女児		計
		4歳児	5歳児		4歳児	5歳児	
同性兄弟	いない	8 66.7%	4 33.3%	12 100.0%	5 33.3%	10 66.7%	15 100.0%
	いる	9 47.4%	10 52.6%	19 100.0%	10 50.0%	10 50.0%	20 100.0%
異性兄弟	いない	7 63.6%	4 36.4%	11 100.0%	5 29.4%	12 70.6%	17 100.0%
	いる	10 50.0%	10 50.0%	20 100.0%	10 55.6%	8 44.4%	18 100.0%

2. 性的ラベリングと性別および年齢の関連

仲間同性選択率、スタイル同性選択率およびコンクリフトの仲間優先率の3つの性的ラベリングの指標について、性・年齢によるTwo-way layout ANOVA with GLMを行った。結果を表4～6に示している。いずれの分析においても、性と年齢の交互作用は認められず、主効果における年齢差も認められなかった。また、主効果の性差は仲間同性選択率とコンクリ

フトの仲間優先率において認められたが、スタイル同性選択率には性差は認められなかった。図1に示す仲間同性選択率の平均値は、男児が女児より有意に高く、図2に示すコンクリフトの仲間優先率の平均値においては、女児が男児よりも有意に高かった。これらの結果から、この時期における性的ラベリングは、年齢差よりも性差が著しいことが窺える。

表4 仲間同性選択率に関する性・年齢の分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	4856.5	3	1618.8	2.5	0.065
切片	483036.9	1	483036.9	756.7	0.000
年齢	165.1	1	165.1	0.3	0.613
性別	4683.3	1	4683.3	7.3	0.009
年齢*性別	89.6	1	89.6	0.1	0.709
誤差	40218.1	63	638.4		

表5 スタイル同性選択率に関する性・年齢の分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	2727.3	3	909.1	2.3	0.084
切片	465946.2	1	465946.2	1188.3	0.000
年齢	76.0	1	76.0	0.2	0.661
性別	1490.8	1	1490.8	3.8	0.056
年齢*性別	934.6	1	934.6	2.4	0.128
誤差	25094.4	64	392.1		

表6 コンクリフトの仲間優先率に関する性・年齢の分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	7595.0	3	2531.7	2.9	0.041
切片	106430.4	1	106430.4	123.0	0.000
年齢	325.1	1	325.1	0.4	0.542
性別	4904.0	1	4904.0	5.7	0.020
年齢*性別	2353.4	1	2353.4	2.7	0.104
誤差	54531.9	63	865.6		

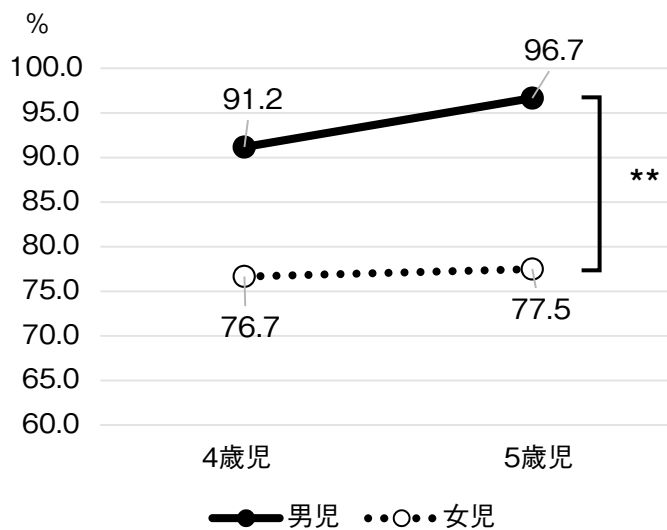


図1 仲間同性選択率に関する性・年齢別平均値

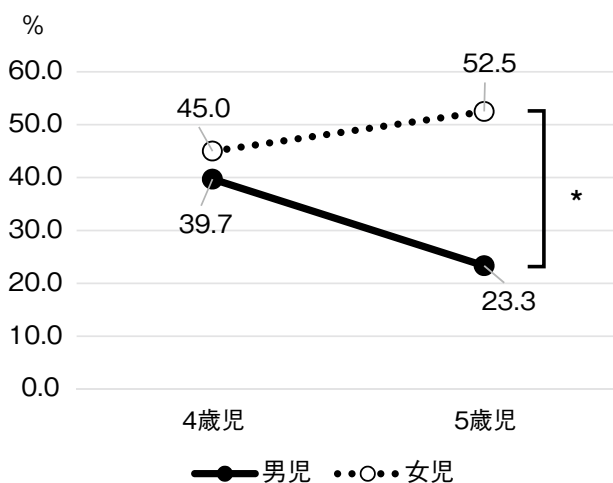


図2 コンクリフトの仲間優先率に関する性・年齢別平均値

3. 性的ラベリングと性別およびきょうだい構成の関連

性と年齢のTwo-way layout ANOVA with GLMでは、いずれの性的ラベリング指標にも年齢差は認められなかった。そこで、性ときょうだい構成の2要因により、改めてTwo-way layout ANOVA with GLMを実施した。性と同性きょうだいの有無においては、仲間同性選択率、スタイル同性選択率およびコンクリフトの仲間優先率のいずれにおいても、2要因の交互作用は認められず、主効果の同性きょうだいにも有意な差は認められなかった。また、すべての分析において性差が認められ、仲間同性選

択率およびスタイル同性選択率においては、男児が女児よりも有意に高く、コンクリフトの仲間優先率においては、女児が男児よりも有意に高かった。これらの結果は、同性きょうだいの存在が性的ラベリングに与える影響は少ないことが窺える。

次に、性と異性きょうだいの有無についてTwo-way layout ANOVA with GLMを実施した。その結果、仲間同性選択率およびコンクリフトの仲間優先率においては、2要因に交互作用は認められず、主効果では性差のみが認められ、仲間同性選択率は男児、コンクリフトの仲間優先率は女児の平均値が高かった。しかし

表7 スタイル同性選択率に関する性・年齢の分散分析表

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	6000.8	3	2000.3	5.8	0.002
切片	422585.4	1	422585.4	1218.6	0.000
性別	1825.4	1	1825.4	5.3	0.025
同性兄弟	1693.1	1	1693.1	4.9	0.031
性別 * 異性兄弟	2080.9	1	2080.9	6.0	0.017
誤差	21153.1	61	346.8		

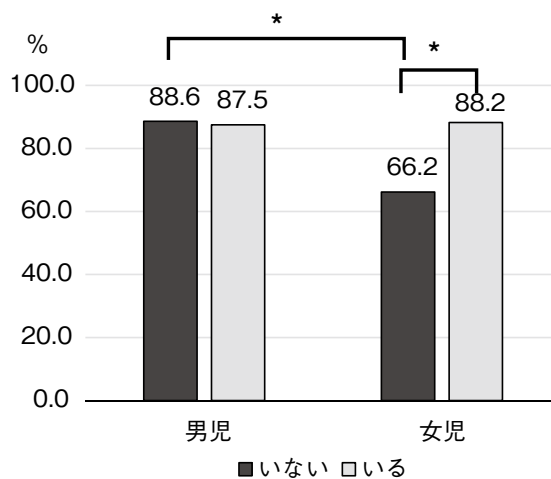


図3 仲間同性選択率に関する性・異性きょうだいの有無の平均値

ながら、表7に示すように、スタイル同性選択率では、2要因に交互作用が認められた。そこで、多重比較検定を行い、性と異性きょうだいの有無の組み合わせによる4群の平均値の比較をおこなった。その結果、図3に示すように、異性のきょうだいがいない男児のスタイル同性選択率は、異性きょうだいがいない女児よりも有意に高かった。また、異性きょうだいがいる女児は、それがいない女児よりも、スタイル同性選択率が高かった。

4. 性的ラベリングおよび家庭での生活との関係

性的ラベリングの差を検討するためのTwo-way layout ANOVA with GLMにおいては、仲間同性選択率、スタイル同性選択率およびコンクリフトの仲間優先率の3つの性的ラベリングのほとんどで、主効果における性差が認められた。よって、性的ラベリングの指標と家庭

生活の関連においては、男女別にピアソンの積率相関係数を算出した。男児の結果を表8、女児を表9に示している。男児においては、性的ラベリングの指標間に有意な関連は認められなかった。また、性的ラベリングとの関連が認められた生活時間は、降園後の身体活動で、負の相関が認められた ($r = -0.556$, $p < 0.05$)。このことは、幼稚園から帰宅した後に、身体活動が長い男児は、コンクリフトの状況で同性を優先するのではなく、遊びスタイルを優先することを示している。つまり、人よりも遊びスタイルを重視することが窺われる。一方、女児においては仲間同性選択率とスタイル同性選択率は有意な正の相関を示した ($r = 0.441$, $p < 0.01$)。つまり、遊び相手に同性を選択する女子は、遊びスタイルも同性を選択する率が高いことを示している。また、性的ラベリングと生活時間では、仲間同性選択率と降園後の身体活動時間に有意な負の関連が認められた ($r = -0.542$, p

表8 性的ラベリングと家庭での生活の関連 (男児)

	a)	b)	c)	d)	e)	f)
a) 仲間同性選択率	1	0.021	-0.143	0.367	0.188	0.185
b) スタイル同性選択率		1	-0.121	0.060	-0.067	-0.272
c) 仲間優先率			1	-0.556	-0.197	-0.128
d) 降園後の身体活動			*	1	0.413	0.069
e) 遊び時間					1	0.328
f) スクリーンタイム						1

右上：相関係数 左下：有意確率 * $p < 0.05$

表9 性的ラベリングと家庭での生活の関連 (女児)

	a)	b)	c)	d)	e)	f)
a) 仲間同性選択率	1	0.441	-0.018	-0.542	-0.002	-0.119
b) スタイル同性選択率	**	1	-0.226	0.012	0.085	-0.327
c) 仲間優先率			1	0.136	0.080	-0.011
d) 降園後の身体活動		*		1	0.161	-0.154
e) 遊び時間					1	0.003
f) スクリーンタイム						1

右上：相関係数 左下：有意確率 * $p < 0.05$ ** $p < 0.01$

く0.05)。この結果は、女兒同士で遊ぶことを選択する幼児の身体活動時間が短いことを示している。

まとめ

幼児期における「性的ラベリング」の実態ときょうだい構成および家庭生活の関連について検討するため、69名の幼児を対象とした面接調査と、幼児の保護者を対象としたアンケート調査を実施した。結果は以下のとおりである。

1. 仲間として同性を選択する傾向は、男児女兒ともに加齢に伴い高くなる。
2. 遊びスタイルについて同性を選択する傾向は、男児では加齢に伴い高くなるが、女兒では逆に低くなる。このような結果は、増田・中尾（1981）の「男児は女兒に比べて性に適切な行動をより早く、しかも明確に限定され、また性的ラベリングという社会的刺激に対して敏感である」という指摘を支持している。
3. 仲間とスタイルが対立する状況において、女兒は加齢に伴い、仲間を優先する傾向が強くなるが、男児は反対にスタイルを優先する傾向が強くなる。本研究では、鈴木（2003）による「幼児には自分の性にあった遊びスタイルを選択する傾向があり、遊び仲間よりも遊びスタイルを優先させて遊びを選択する」という指摘は、男児について顕著になった。
4. 性的ラベリングの差は、年齢よりも性において顕著に現れる。
5. 性的ラベリングときょうだい構成では、同性きょうだいの存在よりも異性きょうだいの存在が、性的ラベリングのコンクリフトに影響している。
6. 帰宅後の身体活動時間が長い男児は遊びの

スタイルを優先し、身体活動時間の短い女兒は、女兒同士で遊ぶ傾向にある。

以上の結果から、性的ラベリングの形成には、家庭での養育環境としての親の働きかけ、与えられる玩具の違い、その玩具での遊びが影響することが窺えた。家庭で形成された性役割は、保育所や幼稚園における保育・教育の中で、さらに強化されていくことが予想される。幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領には「ジェンダー・フリー」に関する直接的な文言は示されていないが、家庭教育にも影響を与えると思われる保育者のジェンダー・フリーに関する認識は人権教育の面からも急務であり、それを目的とした教材の開発が求められる。その際、保育者の女性の割合が、幼稚園教諭93.9%、保育士98.7%（内閣府男女共同参画局，2006）であることも配慮しなければならないと考える。

謝辞

本研究は、平成28年度福岡県立大学研究奨励交付金（附属研究所重点領域研究：研究課題名「田川・筑豊地区における地域教育課題の抽出と運動経験や道徳・規範意識の芽生えを意図した教材開発および保育者教育」）の助成を受けて実施された。また、研究にご理解・ご協力いただいた田川市内の幼稚園の園児とその保護者の皆様、先生方、田川市教育委員会およびデータの収集に協力いただいた学生諸君に心より感謝申し上げます。

参考文献

青野篤子（2008）園の隠れたカリキュラムと保育者の意識，福山大学人間文化学部紀要，8，19-34

- 福定美保子・田中俊也・新實陽子・才木敦子・伊澤美
恵子 (1990) 男女比のアンバランスなクラスの3歳
児の遊びの発達, 日本保育学会大会研究論文集, 43,
428-429
- 伊藤秀志・富田寿人 (2007) 遊びの相手や内容が幼児の
体力に及ぼす影響について, 体力科学, 56(6), 705
- 岩崎洋子・朴淳香 (2009) 幼児期の運動と園での生活・
遊び技能の関連: 性差と年齢差の視点から, 日本女
子大學紀要家政學部, 56, 17-22
- 岩崎洋子・朴淳香 (2010) 幼児期の運動と園での生活・
遊び技能の関連2: 性差と年齢差の視点から, 日本
女子大學紀要家政學部, 57, 11-15
- 岩崎洋子・朴淳香 (2012) 幼児期の運動と園での生活・
遊び技能の関連4: 性差と年齢差の視点から, 日本
女子大學紀要家政學部, 59, 1-4
- 小橋川慧 (1967) 幼児の異性役割活動に及ぼすモデル
の影響, 教育心理学研究, 15(1), 4-41, 62-63
- 厚生労働省 (2008a) 保育所保育指針, フレーベル館
- 厚生労働省 (2008b) 保育所保育指針解説書, フレーベ
ル館
- 増田公男・中尾忍 (1981) 幼児の遊び行動に及ぼす性差,
性役割選択及び性的ラベリングの効果, 教育心理学
研究, 29(1), 75-79
- 文部科学省 (2002) 幼稚園教員の資質向上についてー
自ら学ぶ幼稚園教員のために (報告)
- 南憲治 (1978) 幼児の性役割行動の習得に及ぼすモデル
の効果: 言語的手がかりと視覚的手がかりを中心
に, 教育心理学研究, 26(3), 152-161
- 内閣府男女共同参画局 (2006) 女性のチャレンジ支援
に関する評価方法調査最終報告書, 家計経済研究所
[http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/
sankakushisuu/pdf/shisuu-h.pdf#page=184](http://www.gender.go.jp/research/kenkyu/sankakushisuu/pdf/shisuu-h.pdf#page=184)
- 大内晶子・櫻井茂男 (2008) 幼児の非社会的遊びと社
会的スキル・問題行動に関する縦断的検討, 教育心
理学研究, 56(3), 376-388
- 進野智子・小川理恵・加藤千恵・川端紀子・松尾登紀子・
松島綾・松永康代 (1993) 幼児の遊びに関する発達心
理学的研究: 幼児のひとり遊びに関する研究 I, 長崎
大学教育学部教育科学研究報告, 45, 231-242
- 鈴木香奈恵 (2003) 幼児期の遊び選択に及ぼす性と遊び
スタイルの影響, 明和学園短期大学紀要, 15, 17-27
- 山際邦子 (1966) 幼児の道具選択の指向性に関する一
実験的研究, 白梅学園短期大学紀要, 2, 96-104